

60 越中高岡見在江戸後期蘭語医事資料 について

正橋 剛 二

江戸時代後期の高岡町医のうち、長崎・佐渡両家はこの地の蘭方医の先駆として重きをなし、両家の当主たちは西欧医学の消化吸収に極めて熱心で、その知識を逸早く臨床に応用し、また新知識を次世代に伝えるべく集積に努めた。

時移り、今やこの資料は貴重な医学史資料、ないし文化遺産として、順次公的な管理下に移り、公開、閲覧に供されるようになった。すなわち、まず、佐渡家資料のうち一、〇四六タイトル(四、二六三冊)が「蒼龍館文庫」として金沢市(玉川図書館・近世資料館)ですでに整理公開され、残余(三七九タイトル、九三二冊)は今回地元高岡市の英断により同市(高岡市中央図書館)で公開を待つ運びとなった。一方の長崎家資料(一九二タイトル、四〇三

冊)は先年来同図書館に寄託され、利用に供されている。かくて、高岡蘭方医たちの行跡は総合的な調査が可能となり、今後は一段と研究の進展が期待されている。

演者は右資料群中、とくに蘭語による史料およびこれに付随して、両家の人々により如何に利用されたか、また結果として生じた二次的成果を含めて調査を試みた。この際とくに地域性に重点をおき、単に当地へ移入され、また利用されただけの情報——例えば、『解体新書』『重訂解体新書』『医範提綱』『泰西医方名物考』等——は敢えて割愛することとした。ただし、この場合といえど、蘭語理解の方策・手段として重要な役割を持つ文典・文法書・辞書類は例外としてここに含めた。

右の基準により選り出された史料を筆者の区分に従い分類すると次のようになった。

I 蘭文史料——二九点

A 刊本(舶載本、長崎版、江戸版等) (11)点

B 写本 (18)点

II 翻訳史料——二八点

A 刊本 (2)点

B 写本

(26)点

III 翻訳編纂史料(刊本のみ)——三点

IV 邦文(和文・漢文)・蘭訳史料——一点

V 欧州語文典・辞書類——四九点

A 文典・文法書

(30)点

B 辞典

(19)点

合計 一一〇点

〔右の各史料名の一覧表は口演の時配布する。〕

従来、長崎家資料、とくに長崎浩齋について調査していた演者には蘭方医とは言え、同家には直接蘭語蘭文史料がいかにも少く、これは浩齋の遊学(文化十四年、大槻玄沢門)が短期的(二〇〇日に限定)であった故、『蘭学階梯』にみる極く初歩的な百人一首の蘭字表記法の練習に止まったものと推定していたが、これに反し、佐渡家の場合は三良(九代目養順)良益(坪井信良)光昭(建部賢隆)脩造(阿波加氏)等の兄弟(いずれも浩齋の妹トラの挙子)の世代では、それぞれ小石究理堂、坪井日習堂、緒方適塾等に、二・三年の期間を過した故、この人たちの蘭語への取組は甚だ果敢で、目を瞠るものがある。浩齋より

わずか二〇ないし三〇年遅れた世代であるが、その活動ぶりは刮目すべきものがある。

これはまた、当時の高岡における医学・医療の日進月歩の様相を裏付ける史料と理解された。

このように言っても、これは決して浩齋の数々の業績——例えば『浩齋医話』(後改題して『五泉堂医話』。天保二〜七年の著述、玄沢、元瑞の校閲を受けた)や『蘭学解嘲』

(天保十年頃の著作、岡田憲齋序、五十嵐篤好跋)など——の評価を減ずることはならない。いずれも上梓を予定した稿本であるが実現しなかったことが惜まれる。そして、甥たちはそれぞれ自著の上梓を果しており、伯父の素志を遂げた。演者としては、この伯父にしてこの甥たちありの感を深くした。

(医)白雲会、富山市